



西院付近のようす (右京四条二坊十六町) 建物のあとを耕作に利用していたことが小溝の発見でわかった。



四条烏丸付近のようす (左京四条三坊五町) 建物が何度も建て替えられたために、遺構が複雑に重なりあっている。

朝堂院付近は何度も火災を受け、そのつど補修や再建をします。ところが、後期には次第にそれも行なわれず、荒れて「内野」と呼ばれるようになりました。実際、平安宮の調査では、中期には火災始末のゴミ捨て穴が見られ、後期になると遺構・遺物は少なくなります。11世紀以降、内裏は里内裏として、左京の貴族の邸宅の中に移ります。天皇や貴族の力は次第に衰え、もはや内裏などを再建する力はありませんでした。

左京が変わる 右京や平安宮が衰退すると、左京が都市の中心となります。左京では、全域でこの時期の遺構が多数発見され、大量の遺物が出土しています。特に四条室町周辺や、七条烏丸付近などに集中します。遺物には、輸入陶磁器や各地で生産された陶器などが数多く出土し、都市を特徴付けています。調査では、金属加工などの工房跡や、陶器・磁器類の店と考えられる場所も見つかります。これは東西市に代わって、

三条町・四条町・七条町が商工業の中心地となり、商人や手工業者が活発に活動したことを物語っています。このころの京都の人口は15～18万人と推定されます。

このような住民の集中を反映して、三条烏丸北西部・三条東洞院北東部・七条烏丸南東部などでは、道路側溝を埋め、築地を築して宅地を広げています。このように、条坊制は形だけのものとなり、住民の生活にあわすように都市が変わります。これは、それまで「左京〇条〇坊〇町」と呼ばれた土地が、この頃から現在と同じように「〇通り西、〇通り北」と呼ばれるようになったことからもうかがえます。

郊外への拡大 平安宮の変質と合わせて特筆すべきことは、平安京郊外の新都市の建設です。藤原氏代々の別荘地である鴨川の東側に、白河・鳥羽上皇らによって法勝寺を始めとする六勝寺や御所が造られます。同じ頃、南には白河上皇によって鳥羽殿が建設されま

す。その後、洛東には後白河上皇によって法住寺殿や寺院が造られます。発掘調査によると、これらの新都市は平安京に似せて基盤目の道路を造り、計画的に大規模な寺院・御所などを配置したことがわかりました。いずれも寺院と院の御所を兼ねていて、天皇に代わって上皇が政治の主導権を持った「院政」の拠点となると共に、権力をほこっていました。しかし、寺院・御所の造営に当たっては、受領層(国司になった豪族)の全面的援助を受け、平氏などの武士層が台頭するきっかけとなります。

平安京から京都へ この時期、「平安京」は「京・白河」に、さらに「京都」と呼ばれるようになります。「京都」とは天皇の住まいという意味ですが、この時から現在まで使われている地名となったのです。律令国家の政治都市である平安京は、政治の変化や住民の活動とともに、政治・経済の中心としての中世都市「京都」にその姿を変えます。(上村 和直)